

紅花はいま

*よみがえる紅花

江戸時代末から明治時代にかけて、安価な中国産紅花や西欧からの化学染料の輸入により、最上紅花は次第に衰退して行きました。ただ、伊勢神宮式年遷宮祭や明治神宮造営式などでの求めもあり、細々とではあるが生産されてきました。しかしその後、太平洋戦争時の食糧増産運動などによって、紅花栽培は完全に姿を消してしまいました。

戦後、山形市や米沢市などから紅花の復興を求める声があり、再び、山形を代表する花、最上紅花がよみがえることになりました。

さらに、こうした紅花復興の動きが高まる中で、かつて京都などで染められていた紅花染が、幾多の困難をのり越えて最上紅花の生産地の一つであった米沢市に復活しました。



*紅花染のできるまで

紅花あれこれ

*紅花染のいろいろ

*紅花の利用 *紅花関係文献

会期中の主な行事

- 映写会 6月6日(日)・7月4日(日)・8月1日(日)
紅花はいま、紅花、紅花の源流をたずねて、シルクロード紀行―熱砂遙かに
- 講演会 6月20日(日) (午後1時30分～3時)
「紅花をたずねて―シルクロードの旅―」
講師／相馬健一氏(山形新聞論説主幹)
- 実演会 7月11日(日) (午前10時～午後4時)
紅花染のできるまで
講師／鈴木孝男氏(紅花染研究家)



紅花の山形路

紅花のすべて展

—紅花と最上川—



紅地松竹梅に
鶴亀紋様中振袖

開催にあたって

県民総参加による「紅花の山形路」大キャンペーンに参加し、紅花をはじめ、最上川舟運に係わる資料を含めて、「紅花のすべて」について紹介することを目的に開催いたします。

この特別企画展を開催するにあたり多くの方がたから御協力をいただきました。厚くお礼を申し上げます。

昭和57年6月

山形県立博物館長

- ◆期間 6月1日(火)～8月8日(日)
- ◆主催 山形県立博物館
- ◆協賛 山形県観光キャンペーン推進協議会

ベニバナ豆知識



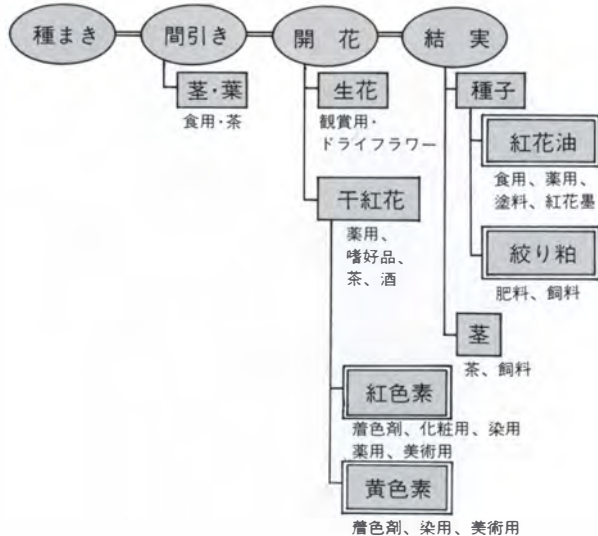
中央アジアあるいはエジプト原産といわれるキク科の越年草で、茎の高さが1m内外、7月上旬、枝の先にアザミに似た鮮黄色の頭花をつけます。

古くはバビロニア人やヘブライ人など

が栽培しており、中国には3世紀の初期に西域よりもたらされ、わが国には推古天皇の時代に高句麗から僧曇徴がもたらしたといわれています。

日本では江戸時代から明治時代中期ごろにかけて重要な染料で、大変高価なものでした。山形県はベニバナの主な産地として昔から知られています。ベニバナはかつて染料をはじめ、漢方・紅花墨・金箔の代用などにも用いられ、現在では油料はもとより食品染料・野菜など広く利用されています。

* 紅花の主な用途



紅花ロマン

* 紅花染

赤は太陽の色を表すといわれ、力の象徴として、衣裳に用いられました。

この赤色染料としては、紅花・蘇芳・茜などがありますが、特に紅花は、紅のもつ医学的な効果からも多く求められました。

かつて山形でも、「最上紅」や「紅木綿」「紅花染」などが作られておりました。しかし、最上紅花の多くは花餅状に乾燥され、京都や江戸に送られました。それは、豪華な紅染衣裳に染め上げられ、一部は、紅花商人達によって山形に持ち帰られました。

* 歌に詠まれた紅花

* 清風と芭蕉

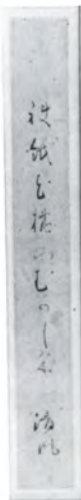
鈴木八右衛門・清風は、紅花大尽といわれた豪商であり、また、すぐれた俳人でもありました。商売で江戸と往来するうち、芭蕉とも交わったと思われます。

元禄2(1689)年3月27日(現5月中旬)江戸千住を出立した芭蕉は、堺田越えから出羽国に入り、山刀伐峠を越え、5月18日尾花沢に清風を訪ねました。芭蕉は『奥の細道』の中で、「かれは富めるものなれど志いやしからず…日比とどめて長途のいたはり、さまざまにもてなし得る」と紹介しています。

* 紅花の源流をたずねて

山形新聞社・山形放送では、社の八大事業として、昭和52年「紅花の道を探る」海外調査団をインド・アフガニスタン・エジプトへ派遣し、紅花の原種・種子を求め調査、取材しました。紅花の原種の確認、紅花の利用など、多くの成果がありました。

昭和56年には「中国・西域の文化を探る」訪中取材団をシルクロードに派遣し、シルクロードと日本、山形のかかわりを中心に、西域の文化・歴史を取材しました。特に本県特産のブドウ・紅花を中心に、中国の農業の現状をつぶさに取材しています。



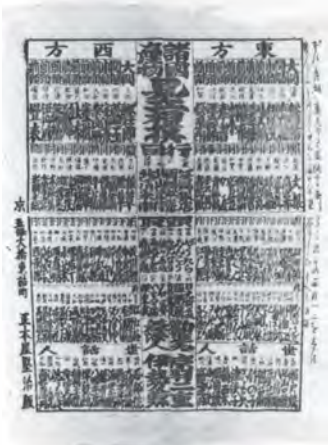
清風の短冊

山形に映える紅花

* 出羽の特産 最上紅花

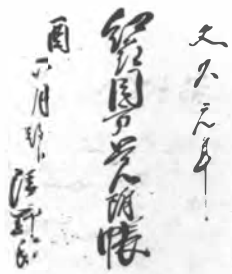
江戸時代には、漆・桑・楮・茶を四木、麻・藍・紅花を三草とよび、重要な商品作物で、各地でさかんに栽培されました。

村山地方や置賜地方では、青苧・紅花・漆が特産物として知られ、なかでも、村山地方の最上川沿いの村々では、紅花がさかんに栽培されました。すでに、室町時代末には紅花栽培がはじまっており、江戸時代中期以後には「最上千駄」と称されて、全国生産額の半分以上を生産し、品質もすぐれ、「最上紅花」ともてはやされました。



諸国産物見立相摸番附

と称されて、全国生産額の半分以上を生産し、品質もすぐれ、「最上紅花」ともてはやされました。



紅花目方覚附帳

* 紅花商人の活躍

紅花は、口紅の原料であるとともに、藍などとならぶ代表的な染料用植物で、とくに京染めには欠くことのできないものでした。

山形をはじめ、天童・寒河江・谷地などには、紅花を取り引きする商人が多数生れ、村々から紅花を買い集めて京都の紅花問屋に送り、上方からは、木綿・塩・繰綿などの商品を仕入れて売りさばき、大いに栄えました。

遠い京都との取り引きには危険も多く、商人たちは、航海安全や商売繁昌を祈る石灯籠を寺社に奉納するなど、家門の繁栄を願いました。



紅花屏風



紅花絵巻

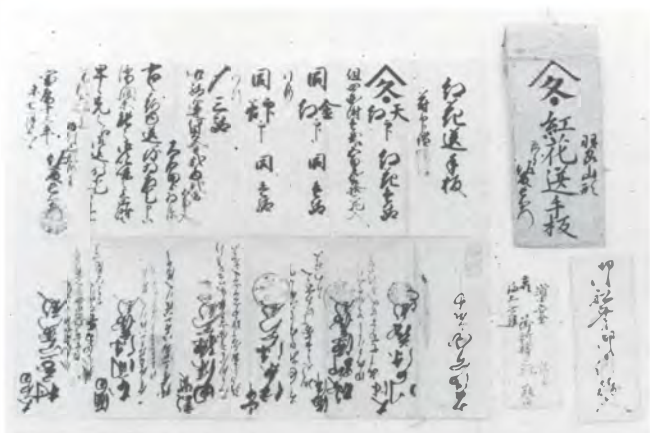


紅花仕切帳



紅花灯籠

紅花の道



紅花送り手板とお守り札

* 紅花と羽州街道

* 紅花と最上川

山形を貫流する最上川は、江戸時代から明治時代にかけて、最も重要な物資輸送路でした。大石田をはじめ、寺津・清水、須川沿いの船町などに河岸や船着場が設けられ、艀船や小鵜飼船が上り下りしました。

米をはじめ、大豆、小豆などの穀物や、紅花・青苧・煙草などの特産物が積み下され、塩・木綿・繰綿などが積み登せられました。



最上川 絵図

中でも高価な紅花は、三難所をさけて大石田まで駄送され、大石田で船積みされて酒田まで積み下されました。



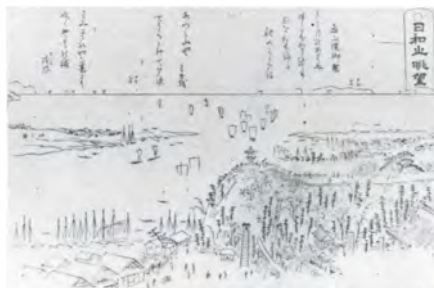
川船押絵馬

* 紅花と酒田湊

酒田は、戦国時代の終りごろには、日本海側指おりの港でした。江戸時代に入って西廻り航路が開かれると、最上川舟運と海運を結んで一層栄えました。

最上川を下される米・紅花・青苧や、上方や北国から海船でもたらされる塩・木綿・塩引などの商品を扱う荷問屋や大商人が多数あらわれました。

最上川を下された紅花は、酒田で海船に積み込まれ越前の敦賀で陸揚げされて、琵琶湖を経て京都まで運ばれました。



酒田十景のうち 日和山眺望



北前船いかり



紅花の山形路

紅花のすべて展

—紅花と最上川—

◆期間 6月1日(火)～8月8日(日)

◆会場 山形県立博物館

◎展示内容 ・山形に映える紅花 ・紅花はいま ・紅花の道
・紅花ロマン ・紅花あれこれ

◎行事 ●映写会 6月6日(日)・7月4日(日)・8月1日(日)
紅花はいま、紅花、紅花の源流をたずねて、
シルクロード紀行—熱砂遙かに

●講演会 6月20日(日)(午後1時30分～3時)
「紅花をたずねて—シルクロードの旅—」
講師／相馬健一氏(山形新聞論説主幹)

●実演会 7月11日(日)(午前10時～午後4時)
紅花染のできるまで
講師／鈴木孝男氏(紅花研究家)

◎その他

- 開館時間
午前9時～
午後4時30分
- 休館日
毎週月曜日
- 入館料
個人 大人 200円
小人 100円
団体 大人 100円
(20名以上) 小人 50円

